

巻頭感 2017年度年頭にあって

図書館長 新井泰彦

桜のトンネルをくぐるように晴れやかに未来に歩む新入生を迎えて千里山での関西大学入学式は例年行われている。本年は、四月を迎えたと言うのに肌寒い日が続く、季節がゆっくりと動くを感じるまるで早春かと思まがうばかりの桜の足音をはるか遠くに聞きながらの入学式であった。とはいえ関西大学図書館も入学式とともに新たな一年を踏み出した。

本学図書館は、ここ数年電子ジャーナルの高騰化に翻弄されつつも、大学構成員のアイデア、英断・努力に基づく力強いご支援のもとに図書館規程第二条に記す大学図書館としての目的を遂げることができている。ご理解、ご支援に深く感謝いたします次第である。

さて、図書館の活動は、書籍に親しみ、書籍に囲まれ埋もれ、文字と日夜格闘する研究のイメージが多くの方の脳裏には深く刻まれているのかもしれない。その意味において、私のようなガサツなものにはこの職は務まらないと、大変なことになるものと覚悟をしたのは昨年9月のことであった。しかし、いざ実務に就くと深い教養が求められる以前に、図書館が社会の荒波に洗われ、さらわれぬように踏ん張ることがまず求められていることを思い知らされた。そのために館長には、そろばん勘定、厚かましき（それも「ど」が付くほどの厚かましき）、鈍感さが求められていることを知るに至った。幸か不幸か厚顔無恥ゆえの無教養ぶりが不思議なことに、皆様のお力添えのもとにというか、幾分哀れみをもってのご支援を賜って、何とか業務に踏みとどまることができているものと我ながら、皮肉にも自らのできの悪さに改めて感謝する今日この頃でもある。

しかし、図書館長としての初心に戻ると図書館が本来目指すものは、電子ジャーナルの問題だけでなく、関西大学の教育・研究活動の足元を支え、さらに、全学的な学術活動を結び付け、融合させ、発展させるところにあるものと信じている私にとっては、まだ、何も手が付けられていないという忸怩たる思いに打ち拉がれている今日この頃でもある。

海外の大学図書館との連携を通じた本学研究者の活動の場の広がり支援、本学図書館が所蔵する貴重な書籍・文献に立脚した研究活動の場の拡大、さらに、一昨年整備されたラーニングコモンズを利用する学生の様々な学習・研究活動の促進、リポジリーにも代表される情報発信などについてしっかりと、対応していかなければならないものと強く意識している。書籍・電子ジャーナルを管理することも大切な仕事であるものと認識しつつ、日々の管理運営に本来目指すべき活動が埋没しないように取り組まなければならないものと肝に銘じている。

図書委員会が学内の様々な意見・情報交換・交渉の場として機能するだけでなく、関西大学の学術の基礎を担い、未来に向かって大きく羽ばたくための議論の場となることを願っている。本年はその活動の元年として、取り組んで参りたく思っている。

その第一歩として、千里山の総合図書館での活動のみならず、定期的にご報告をいただいているとは言え、高槻・高槻ミュージズ・堺のそれぞれのキャンパスにおけるサテライト図書館の活動状況をつぶさに知るために、3キャンパス図書館をそれぞれに関連業務を持つ課員並びに委託業者管理担当者とともに訪問した。

関西大学図書館は、2000年より従来専任職員が担っていたカウンター業務をより図書館業務の専門性の向上・高度化・活動の充実を目指して、資格を持つ本学専任職員と最新の図書運営技術を有する専門集団とをネットワーク技術によって融合した図書館管理システムを構築してきている。この取り組みでは、大学設置基準第38条に抵触しないようにそれぞれのキャンパスサテライト図書館の施設整備、他大学との協力・連携、さらに最新の情報機器を用いた千里山の総合図書館を中核としたネットワークをもとにした高槻、高槻ミュージズ、堺キャンパスの図書館をバーチャルに一体化することによる図書業務の一体運営をはかる方針を打ち出し、それに則って活動している。この方針の構築に当たっては、協力いただいている業者との間で大学図書館としてのサービス向上の在り方に関して深く議論を繰り返し、大学図書館のカウンター業務が最新の情報・運営方法のもとに利用者に可能な限り有益な情報提供、便宜がはかれるようにという視点で行われている。

この方針のもとで、膨大な図書情報を、大学全体の図書関連の活動を最新の情報インフラによって集約させ、整理させようとしている。従来幾分各館が孤立した観も否めなかった状況を連携・統括することにより活性化させ、各館のサービスの均一化、利用者の利便性の向上はもとより、社会に広いアンテナを巡らせている専門集団がもたらす他大学での優れた取り組みの導入も目指し、さらに、各館が従来独自に実施している優れた取り組みを全学に波及させるなど、限られた専任職員だけの活動では捉えきれなかった利点を大学全体に展開しようとしている。

今回の3キャンパス図書館訪問の最大の目的は、現在、単独の業者にすべてのキャンパス図書館業務を委ねていることもあり、大学全体の図書業務情報のサテライト図書館間における共有が円滑になされているのかどうかの状況把握であった。業務委託という「丸投げ」というイメージでとらえられることもあり、経営の効率化のもとで大学全体のサービス低下につながるかのようには見えられないこともある。しかし、情報ネットワークを用いた適切なシステムを構築することによって専任職員のみで活動する以上に外部からの新しいかつ高度な生の情報をもたらされる利点がある。今回このような利点の確認、特に円滑に図書館業務がキャンパス間で均一化されていることを確認することができた。情報ネットワークの持つ力の大きさに触れて改めてその偉大

さに驚かされる次第でもあった。

一方で、詳細な情報がシステムの伝達過程で消失していること、幾分縦割り行政による弊害も確認することができた。もっとも大きな収穫は、各キャンパス図書館ならではの独自の図書情報の大学構成員への周知に関する企画を確認することができたことであり、これらの活動の全学への普及も無理なく大学全体の図書館としての組織的活動の中で可能であることを確認できたことである。

今後は、さらに進化する情報ネットワーク・機器を用いた様々な大学図書館ゆえのありかたを深化させ、本学においてその技術・システムを開発し、社会に提案、普及させることをひそかにもくろんでいる。そして、それが新しい大学図書館の一つのスタンダードとなることを願っている。

ゆっくりと動くのは、春先の季節だけにして、可能な限り迅速に図書委員会の議論・協力のもとに本来の大学図書館がなすべき活動へ邁進していかなければならないものと年頭に当たって強く思っている。

(あらい やすひこ システム理工学部教授)